
バクフーン達の冒険・番外編 スペシャルエピソード・マグマラシ

バクフーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バクフーン達の冒険・番外編 スペシャルエピソード・マグマラシ

【Nコード】

N2163H

【作者名】

バクフーン

【あらすじ】

バクフーンがマグマラシの頃のストーリーを作りました！

（前書き）

バクフーン

「あゝ忘れてた〜!？」

叫んでるね（笑）

ようやく出来ましたよ。

バクフーン

「止めて!？ 今すぐこの短編消去して!？」

ダメ（笑）

ちよつと頑張つて作つたんだから。

それじゃ、バクフーンがマグマラシの頃のエピソード、どうぞー！

フレイムシティ。

ここフレイムシティは、バクフーンやリザードンの生まれ育った場所。

「洗濯は終わりっ！」

さてと、あとは家の中の掃除だな！」

天気が良いこの日、ベランダで洗濯物を干しているポケモンが一人。

名はマグマラシ。

現在のバクフーンである。当時の彼は十歳。
まだまだ子供だが、家に一人で暮らし、自炊^{じすい}もしている。

マグマラシが家の中で掃除を始めてから五分後。

「ふう〜……掃除は終わりっ！」

家の掃除が終わったようだ。

コンコン！

ちょうどその時、誰かがマグマラシの家にやって来たようだ。

「はいどちら様〜?」

マグマラシはドアを開ける。

「よっ!」

そこにいたのはリザード。現在のリザードンだ。歳はマグマラシと同じ十歳。

「おゝリザードじゃん! どうしたんだよ?」

「母さんに頼まれてさ。ほいこれ!」

そう言っテリザードはマグマラシにある物を手渡した。

「ぬおゝ!? こゝこれは……幻のコミック、タウリナーΩ（オメガ）の限定品じゃないか!?」

興奮しているマグマラシ。リザードから受け取ったのは漫画本なのだが、マグマラシはこのタウリナーΩというロボット漫画が大好きなのだ。

「この前母さんがフリーマーケットに行った時に見つけたらしいんだ。お前がこれのファンだったの母さん知ってたから買ってくれたみたいだぜ?」

「マジで！？ うおゝマジ感謝だ！
この恩は一生忘れないから！」

目をキラキラさせながら言うマグマラシ。

「大げさだな」

苦笑いするリザード。

「そうだ！ なあ、久しぶりに遊びに行かないか？ 最近近くに面白い店が出来てさ……」

「あゝ悪い。今日はちょっと用事があるから無理なんだ」

リザードの誘いをすぐに断ったマグマラシ。

「そっか……」

ちょっと残念そうな表情をするリザード。

「じゃあまた今度な。
またな！」

手を振りながら、リザードは自分の家に帰っていった。

「……さて、タウリナーΩを見たいとこだけど、今は我慢我慢」

そう言ってマグマラシは一旦家の中に戻り、受け取ったコミックをテーブルの上に置いた。

そして、シオルダーバッグを手に取り、家から外へ。

「戸締まりはしっかりしないと……」

ちゃんと家のドアに鍵を掛けるマグマラシ。

「よし、行くか！」

マグマラシは走ってある場所に向かった。

海岸。

フレームシティを出てすぐ近くにある海岸にマグマラシは来ていた。

「あの岩が丁度良いかな……」

マグマラシは海岸にあった自分より大きめの岩を見ながらそう呟く。

「そんじゃ始めるか……火炎放射！」

いきなりマグマラシは岩に向かって火炎放射を放った。

だが、火炎放射は岩に向かう途中で軌道がズレてしまい、岩にではなく海の方へ。

「あちゃー……また外れたよ……何がいけないんだ？」

首を傾げるマグマラシ。実はマグマラシ、毎日この海岸に来てはバトルの特訓をしているのだ。

だがまだ火炎放射などの遠距離攻撃を上手くコントロール出来ない様子。

「そんなに力^{りき}んだら、狙^そいが逸れるに決まってるでしょ？」

その時、何処からか声が聞こえてきた。

「えっ誰？」

マグマラシは声が聞こえてきた方に振り向く。

そこには自分と同じマグマラシがいた。

しかも色違いのマグマラシだ。普通のマグマラシと違い、体毛の色が少しオレンジ色になっている。ちなみにこの色違いのマグマラシは女の子である。

（か、可愛い……）

一目見た瞬間、マグマラシは自分の胸が凄くドキドキしているのを感じた。

「君、火炎放射何かの遠距離攻撃はそんなに力んじゃダメよ。もつと身体のを抜かなきゃ」

色違いのマグマラシが側まで来てアドバイスをしてくれている。

「そ、そうなの？」

何故か声が震えているマグマラシ。
おまけに顔が赤面している。

「そうなの。ちょっと見てなさいよ……火炎放射！」

色違いのマグマラシは先程マグマラシが狙った岩に向けて火炎放射を放った。

火炎放射は見事に岩に直撃した。

「す、凄い……」

「さあ、次はあなたがやってみて」

色違いのマグマラシは岩を指しながらそう言った。

「よ、よし……」

マグマラシは火炎放射を放つ体勢に入る。

（身体のを抜く……）

心の中でそう呟きながらマグマラシは身体のを抜く。

「……火炎放射！」

マグマラシは岩に向けて火炎放射を放った……のだが、今度は力を抜きすぎたせいか、火炎放射は途中で失速。岩に当たる前に消えてしまった。

「……あり？」

首を傾げるマグマラシ。

「あらゝ身体のを抜きすぎたみたいね」

苦笑いする色違いのマグマラシ。

「難しいなあ……はあ……」

ため息を吐くマグマラシ。

「こついうのはひたすら練習あるのみよ……あっ！？」

何か思い出したのか、色違いのマグマラシはいきなり声を上げた。

「ど、どうしたの？」

「お母さんに買い物頼まれてのすっかり忘れてたわ！ 急がなきゃ！」

慌ててフレイムシティに向かって走る色違いのマグマラシ。
だが、途中で急に立ち止まり振り向いた。

「ねえ！ 明日もここに来る？」

「えっ？ う、うんそのつもりだけど？」

「解ったわ！ 明日、あなたの特訓手伝ってあげるわ！ じゃあね
！」

そう言っただけで彼女はまた走り出した。

「あつちよつと待って！」

君の名前は？」

マグマラシの声が聞こえたのか、彼女はまた立ち止まり振り向いた。

「レナ！ 私の名前はレナよ！ じゃあ、また明日ね！」

そう言っただけで彼女、レナは再び走り出した。

「レナ……可愛い子だったなあ……」

どうやらマグマラシはレナの事が好きになってしまったらしい。

「ってそつだ！ 俺も今日食料を買いにいけないといけなかったんだ！」

マグマラシは特訓を中止して、荷物を持ってフレイムシティへ走

り出した。

（あのレナって子……可愛かったなあ……）

買い物を終え、家への帰り道の途中、マグマラシは先程出会った色違いのマグマラシ、レナの事を考えていた。
どこか上の空うつわな感じだ。

「ぐえっ!？」

レナの事を考えていて前を見てなかったマグマラシは電柱に顔を思いつきりぶつけた。

「痛たたたた……」

両手で鼻を押さえるマグマラシ。余程痛かったのか、ちょっと涙目になっている。

「……何してんだよ?」

その時、マグマラシの背後からリザードがやってきてマグマラシに声を掛けた。

「リザード!? ……見てたのか?」

「見てた。バツチリと」

ちよつと笑みを浮かべながらリザードは言った。それを聞いたマグマラシは赤面した。

「何かあつたなお前?」

腕組みをしてマグマラシに聞くリザード。

「べ、別に何もねえよ」

恍^{とほ}けるマグマラシ。

「嘘つくな! 素直に吐けよマグマラシ、おらおら!」

右腕をマグマラシの首に巻き付け、左手でマグマラシの頭をグリグリするリザード。

「痛い痛いっての!?!」

「止めてほしけりゃ吐け!」

さらに強くマグマラシの頭をグリグリするリザード。

「わ、解った言う! 言うから止めて!?!」

その言葉を聞いてリザードはグリグリするのを止めた。

「あゝ痛かった……お前少しは加減しろ!」

グリグリされた所を両手で押さえながらマグマラシは言った。

「これでも加減した方だぜ? それより、喋ってもらっぞ」

両手を腰に当てながら言っリザード。

「はあ……解ったよ」

マグマラシはリザードに、海岸で可愛い色違いのマグマラシ、レナに出会った事を話した。

「……はっはゝん……さてはお前、そのレナって子に惚れたな?」

嫌らしい目でマグマラシを見つめるリザード。

「バ、バカ!? んな訳ねえだろ!?!」

慌てて否定するマグマラシ。だが、顔は赤面している。

「やっぱ惚れてんだ?

解りやすいよなお前」

笑顔で言っリザード。

「だから違っつつつの!?!」

「ハハハ……解った解った、違っつて事にしといてやるよ」

「……何かムカつく」

膨れっ面になるマグマラシ。

「まあ、そのレナって子に嫌われないよう頑張りな！　じゃあな！」

そう言うとりザードは自分の家に向かって走り出した。

「……リザードの奴……完全に俺がレナに惚れてるみたいに言いやがって……別に惚れて何か……いやでも嫌いって訳でも無いし……どっちかというとき……って何言ってるんだよ俺！？」

一人ぶつぶつと呟くマグマラシであった。

翌日の朝。

「ふぁ〜……眠い……」

テーブルに寄りかかって寝ていたマグマラシが目を覚ました。
まだ目がとろんとしている。

「タウリナーΩ……読み切る前に寝ちゃったみたいだな……」

マグマラシの手には昨日リザードから受け取ったタウリナーΩの
コミックが握られていた。

昨日の夜に読んでいたのだが、眠気に負けそのまま寝落ちしたら
しい。

「今何時だ？」

徐におもむろテーブルに置いてある目覚まし時計を手取るマグマラシ。

「……午前十一時……寝過ぎたなこりゃ……」

苦笑いするマグマラシ。

「……とりあえず、飯食って海岸に行くか……ってその前に掃除が
先だな、よし！」

目を覚ます為に気合いを入れるマグマラシ。
その後マグマラシは家の中の掃除を始めた。

「……よし、こんなもんかな？」

掃除開始から五分……ようやく掃除が終わったようだ。

「あゝ腹減った……飯だ飯♪」

ご飯を作る為、マグマラシは台所へ。

そして簡単な料理を作り、それを食す……のだが量が半端ではなかった。まずご飯は器に山のように盛られていて、木の実を使った料理、軽く五人分はあるであろうか……それを物凄い勢いで食べていくマグマラシ。

しばらくして……

「ふゝ食った食った♪」

……でも何か足りないなあ」

食べ足りない様子のマグマラシ。

「つていかんいかん。

節約する為にも我慢しなきゃ」

節約と言うがすでに節約出来ていないと思われる。

「そんじゃ片付けたら行くか！」

食器を片付け、出掛ける準備を済ませたマグマラシは家の戸締ま

りをしっかりとした後、海岸目指して出発した。

「あっマグマラシだ」

その時、散歩していたリザードが偶然海岸に向かうマグマラシの姿を目撃した。

「……ちよっとつけてみるか」

リザードはマグマラシを追いかける事にした。

海岸にやって来たマグマラシ。まだレナは来ていないようだ。

「とりあえず練習すつか！」

火炎放射を岩に当てる練習を始めたマグマラシ。

（身体の力を抜く……でも抜きすぎないように……）

昨日レナに言われた事を思い出しながら火炎放射を放つ体勢に入る。

「ふ……火炎放射！」

マグマラシは口から炎を吐き出し、岩に向けて放った……が、火炎放射は途中で大きく上に上昇してしまい、岩に当たらなかった。

「あちゃゝ力入れすぎたみたいだな」

苦笑いするマグマラシ。

「……あいつ……あの時からずっと特訓してたのか……」

マグマラシを岩陰からこっそりと覗いていたリザードがそんな事を呟いた。リザードが言うあの時……それはマグマラシがまだヒノアラシの時、母親のリリを目の前で殺された日の事だ。

「……いつも用事があるって言ってたのは特訓をする為だったんだな」

「あなた、ここで何してるの？」

突然リザードは背後から誰かに声を掛けられた。リザードはビクッと身体を反応させた後、ゆっくりと振り向く。

そこにいたのは色違いのマグマラシ、レナだった。

（か、可愛い……もしかして、この子がマグマラシが言ってたレナ

「って子なのか？」

「何か怪しいわねえ……ストーカー？」

疑いの眼差しをリザードに向けるレナ。

「って誰がストーカーだ!？」

声を上げるリザード。その声に気づいたのか、マグマラシがやって来た。

「リザード？ 何やってんだよこんな所で？」

首を傾げるマグマラシ。

「いや、ちょっとお前の後をつけただけで……」

「やっぱりストーカーじゃないのよ」

「だからストーカーじゃねえよ!？ それに男が男を追いかけるとか気持ち悪いだろが!？」

またまた声を上げるリザード。

「解らないわよ？」

男の事が好きな男がいるって聞いた事あるし」

まだリザードを疑っているレナ。

「リザード……お前俺の事が好きだったのか」

悪乗りするマグマラシ。

「って何でそうなんだよ!？」

それからしばらくマグマラシとレナの悪乗りに振り回される事になったリザードであった。

「……さて、悪乗りはここまでにしとくか」

「そうね」

いつの間にか意気投合しているマグマラシとレナ。

「はあ……何かどつと疲れた……」

地面に座り込んでしまったりザード。

「そういえば、まだちゃんと挨拶してなかったよね？ 俺はマグマラシ、んでこいつがリザード。よろしくね!」

笑顔で挨拶するマグマラシ。

「よろしく♪ それじゃ、早速始めましょうか！ 君も一緒にね！」

リザードの事を見ながらレナは言った。

「って何で俺まで！？」

「皆でやった方が楽しいからに決まってるからじゃない♪」

「やろっぜりザード♪」

とびきりの笑顔で言うマグマラシとレナ。

（何なんだお前は！！？）

心の中で叫ぶリザード。結局この後三人で仲良く？ 特訓する事になったのは言うまでもない。

三人が特訓を始めてからかなり時間が経過した。もう太陽が沈みかけている。

「火炎放射！」

マグマラシは岩に向けて火炎放射を放った。

今まで当たらなかった火炎放射がついに岩に直撃した。

「よっしゃー！」

ガッツポーズをするマグマラシ。

「へへ！ なかなかやるじゃんマグ君♪」

「マ、マグ君？」

首を傾げるマグマラシ。

「だってマグマラシでしょ？ だからマグ君♪」

笑顔で言うレナ。

「んじゃ俺は？」

自分の事を指しながら聞くリザード。

「リザード」

「即答！？ しかも普通！？ 何この扱いの違い！？」

「アハハハ……」

リザードとレナのやりとりを見て苦笑いするマグマラシ。

「それじゃあ私そろそろ帰るね！ また明日もここに来る？」

レナの質問にマグマラシは頷いて答えた。

「じゃあまた明日ね、バイバイマグ君♪」

そう言っレナは走り去っていった。

マグマラシはレナの姿が見えなくなるまで手を振っていた。

(やっぱり……可愛いなあ……)

「今レナの事を可愛いって思っただろ？」

マグマラシの隣にいたりザードが嫌らしい目をしながら言った。

「そ、そんな訳!？」

赤面しながら言うマグマラシ。

「図星だな？ まあ確かに可愛いよレナはよ。
仲良くしなよマグ君♪」

からかうようにそう言うとりザードは家に向かって走り出した。

「つたく……」

少し膨れっ面になるマグマラシであった。

三人で特訓した日を境に、彼らはほぼ毎日会って一緒に遊んだり特訓したり……さらには三人でポケモン映画を見たり、季節が夏という事もあったので海岸でスイカ割りをしたり花火大会に行ったり……楽しく日々を過ごしていた。

そして月日が経つのは早いもので、彼らが出会ってから数ヶ月が経過していた。

「……なあマグマラシ」

床に仰向けに寝転がりながらリザードが言った。ちなみに今彼らがいるのはマグマラシの家だ。

「ん？ 何だよ？」

うつ伏せに寝転がりながらタウリナーΩを読んでいるマグマラシが返事した。

「お前、いつレナに告^こるんだ？」

「はあ！？ いきなり何言い出すんだお前！？」

いきなりリザードにそう言われたマグマラシは上体を起こし、思わず声を上げる。

「好きなんだろ？ レナの事がさ」

「き、嫌いじゃないけどさ……」

顔を赤面させるマグマラシ。

「今日も海岸で会う事になってんだからさ。思い切って言っちゃえよ」

リザードにそう言われまた更に顔を赤くするマグマラシ。とその時、コンコンとドアをノックする音が聞こえてきた。

「はい」

マグマラシはドアを開ける。ドアの向こうにいたのはレナだった。

「やっほー」

「レ、レナ！？ どうしたんだよ？」

「海岸に行くんなら一緒に行こうって思ったから来ちゃった」

笑顔で言うレナ。

「き、来ちゃったって」

「早速行きましょ。リザードも来るでしょ？」

「あゝ悪い。今日は母さん達のお店の仕事を手伝わないといけなから無理」

リザードは一緒に行かないらしい。

(リ、リザードの奴……今日はお店休みだろう！俺とレナを二人っきりにするつもりだな！)

心の中でそう言うマグマラシ。

「そうなの？　じゃあ仕方ないわね。行くマグ君」

「あつちよつと!？」

マグマラシは手を引っ張られていった。

レナと二人っきりで海岸にやってきたマグマラシ。

「さて、今日は何する？」

首を傾げながらマグマラシに聞くレナ。

（ど、どうしよう……いつもは三人だからいざ二人っきりになると
すげー緊張する……）

凄く緊張しているせいか身体が震えているマグマラシ。レナの問
い掛けに気づいていないみたいだ。

「ちょっとマグ君、聞いてる？」

「えっ！？ な、何？」

やっとレナの問い掛けに気づいたマグマラシは慌てた感じで答える。

「どうしたのよマグ君？ 何か今日はいつもと違うわね」

「そ、そんな事ないよ」

誤魔化そうするマグマラシだが顔が赤面している。

「嘘はダメよ。マグ君って嘘を言う時すぐ顔に出るから解りやすい
もの。何か言いたい事があるんじゃないの？」

（す、鋭い……）

レナの勘の良さに驚くマグマラシ。

「わ、解った……言うよ」

マグマラシは思い切って言う事を決意した。

「レナ……俺、お前の事……す……す……」

緊張しすぎて上手く言葉が出ないマグマラシ。

「……す、好き……なんだ……」

（あゝ言っちゃったよ俺……）

顔を思いっきり赤面させるマグマラシ。

「……実は……私もマグ君の事……好きよ」

レナも少し顔を赤面させながらマグマラシの事が好きだという事を伝えた。それを聞いたマグマラシは目を丸くして驚いている。

「ほ、本当!？」

「うん……だけど……」

急に俯うつむいてしまったレナ。

「だけど?」

「だけど……マグ君と会えるのは……今日で最後なの……」

今日で最後……その言葉を聞いたマグマラシは驚きを隠せなかった。

「今日で最後って……い、一体どういう事!？」

「……引越すのよ……明日の朝に、海を越えた南の地方にね……だから、こうして会えるのも今日で最後」

寂しそつにしながら言うレナ。

「レナ……」

「……ねえ、今日は思いっきり遊ばない? 思い出作りって意味で」

「……良いよ、楽しもうか!」

笑顔で答えるマグマラシ。それから二人は思いっきり楽しく遊んだ。

最高に良い思い出にする為に……

時間が経つのは早いもので、もう太陽は沈みかけていた。

「……綺麗な夕日だね」

「うん……」

マグマラシとレナは夕日を眺めていた。

「……そろそろ私帰らないと……母さん達が待ってるから……」

「……そっか……じゃあ……さよならだね……」

二人共凄く悲しそうな表情をしている。

「……じゃあね、マグ君」

「うん……じゃあね」

レナは自分の家に向かって歩き始めた。
マグマラシはそれをただ黙って見送った。

（明日の朝……レナは行っちゃうのか……あっそうだ！）

何かを思いついたマグマラシ。急いでマグマラシは自分の家に向

かって走り出した。

翌日の朝。レナは家族と一緒に引越しのトラックに乗って出発しようとしていた。

「これで準備は良いな？」

最後の確認をしているのはレナの父親、ウィンディだ。

「ええ、大丈夫よあなた」

そう答えるのはレナの母親、バクフーンだ。

「解った。じゃあそろそろ行こうか」

ウィンディとバクフーンはトラックに乗り込む。

「レナ、いらっしやい」

「あっうん」

バクフーンがレナをトラックに乗るよう誘う。レナもトラックに乗ろうとした。

「レナー！ ちょっと待ってくれー！」

とその時、レナ達に向かって走ってくるポケモンが。マグマラシとリザードだ。

「マグ君！？ それにリザードも！？」

「はあ……はあ……よ、良かった〜何とか間に合ったな」

息切れを起こしているマグマラシとリザード。全速力で走ってき
たみたいだ。

「どうしたのよ二人共？」

「そんなの決まってるんだろ？ 見送りに来たんだよ」

レナの問いにリザードが答えた。

「そういう事さ……それと俺、レナに渡したい物があるんだ。はい
これ」

マグマラシはレナに一つのぬいぐるみを手渡した。そのぬいぐる
みはレナをモデルに作られていた。

「これ、どうしたの？」

「俺が作ったんだよ。」

何かレナにプレゼントしたいと思ってさ」

実はマグマラシ、レナと別れた後家で一生懸命レナのぬいぐるみを作っていたのだ。

だが、マグマラシはあまり裁縫^{さいほう}は得意じゃないみたいで手には絆^{ばん}創膏^{そうこう}がたくさん貼られていた。

「マグ君……凄く嬉しい！ 大切にするね♪」

本当に嬉しそうにしているレナ。

「レナ……また、いつか会えるよね？」

「……うん、いつかきつとね」

笑顔で答えるレナ。

「レナ、そろそろ行くよ」

父親のウインディがレナを呼んでいる。

「あつ今行くわ！」

レナはトラックに乗り込んだ。

「じゃあねマグ君、リザード！ またいつか会おうね！」

レナがそう言った時、レナ達を乗せたトラックが発した。

「じゃあなレナ！」

手を振って見送るリザード。

「きっと！　きっとまたいつか会おうな！」

マグマラシも手を振りながらそう叫ぶ。
きっとまたいつか会える、そう信じて。

（後書き）

ポケモン一同

「へ〜……バクフーンが恋を……」

バクフーン

「そ、そんな目で俺を見ないで!？」

何か本編で登場したポケモン達がやって来ちゃったね（笑）

バクフーン

「は、恥ずかしい（汗）」

そこまで恥ずかしがる事無いと思うよ？
恋って良い事でしょ？

ピカチュウ

「そうだぜバクフーン！ 恋は素晴らしいんだぞ!」

君が言うと言得力無いよ（汗）

ピチュー

「だよね〜」

ラティース

「ピカチュウさんには悪いですけど……納得です（汗）」

ピカチュウ

「ラ、ラティースちゃんまで……」

あゝらら（汗）

ピカチュウが激しく落ち込んだじゃったよ（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163h/>

バクフーン達の冒険・番外編 スペシャルエピソード・マグマラシ

2010年10月9日20時11分発行